桐蕾

編集発行　第8号
群馬県立桐生工業高等学校
同窓会事務局　編集部
群馬県桐生市西久方町1－1－41
TEL 0277（22）7141
印刷　湯浅印刷有限会社

スポーツ特集

戦後五十年 それぞれの記憶 Ⅱ

第一回選抜高等學校野球大會（23.4）

同窓会長　五十嵐健雄

夕紅葉残虹の消えかかる　一茶

同窓会員の諸兄には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

桐蕾八号の発行に当たり一言ご挨拶を申し上げます。昨年度発行の桐蕾七号特集号は「戦後五十年それぞれの記憶」を発行致しました。本年はその第二弾としてスポーツの特集号と致します。

奇跡と思われた日本の今日の繁栄、素晴らしい経済の発展に大きく寄与したものにスポーツの振興がありました。

フジヤマの飛魚と言われた水泳の古橋広之進選手は敗戦による荒廃で明日への希望の全く持てない混迷の時に幾つもの世界新記録を塗り替え、生きる望みと努力によって発展出来る事を教えてくれました。経済の復興とスポーツの振興は車の両輪の様に共に扶け合い更なる大きな輪となり今日を迎えることが出来ました。

去る七月六日開催の定時総会には校長先生をはじめ顧問各氏、先輩等を迎えて各支部より百十名を超える会員が間もなく解体される産業文化会館に集い、予算決算に引き続いて行われた役員の改選で今日の同窓会発展の基礎を作ってくれた副会長の周藤晴二君、新井庫太郎君が惜しまれ乍ら勇退されました。今迄のご苦労に深く感謝申し上げます。

引き続いて行われた記念講演での、前同窓会長佐藤富三氏による「桐生の織物史と先輩の活躍」には会員一同熱心に拝聴しておりました。

八月二十一日開催の第五回のゴルフコンペには百八十数名の諸兄が赤城カントリークラブで支部対抗戦を交えて技を競い旧交を温め合うことが出来ました。この様に大勢の参加を得られた事は会員各位の同窓会に対するご理解の賜物と感謝致しております。

会の運営に当たり過分なご尽力を戴いている学校と事務局を預かる先生方、それに先輩諸氏の変わらぬご指導に厚く御礼申し上げます。

支部内外の会員諸兄の益々ご健勝の内でのご活躍と更なる交流交歓が促進されます様に祈念しご挨拶と致します。

桐蕾第八号発行にあたって

ごあいさつ

学校長　加藤通顕

猛暑も過ぎ、日一日と秋の気配の濃くなる今日、同窓の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。また、桐蕾第八号が「戦後五十年スポーツ特集」として発行されるとのこと、往年の桐工の姿を垣間見られると心より期待しております。昭和五十年頃までの本校が「スポーツ黄金時代」であり、全国津々浦々まで桐工の名を轟かせたことは周知のことです。全国制覇を成したハンドボールをはじめ、硬式野球・軟式野球・陸上・ラグビー・バスケット・バレーボール・庭球・水泳等々全国を舞台とした活躍は目を見張るものがありました。

その後、所謂高校急増時代や、産業・社会構造の変化による価値感の多様な変化等により本校のスポーツ概況も大きく変化致しました。陸上等の活躍もありましたが、全体的には往時の盛況を得られず扼腕たる気持ちです。そんな中で頑張っているスポーツもあります。ここ一年を振り返れば、インターハイ種目別（体操・跳馬）優勝の長澤俊之君の全日本選手権への出場をはじめとして、テニス・水泳・陸上等が徐々にではありますが活躍を始めました。そして一刻も早く往時に戻るべく職員・生徒一丸となって取り組んでいきたいと思っております。

その本質が、工業高校離れの防止と、魅力ある桐工づくりと信じ、時代の要求に合った教育課程と部活動の形成に励んでいるところです。専門教育や文化活動の分野において本校の存在が輝かしいものになりつつある現在、運動部門でも「黄金時代」に一歩でも近づきたい。そして、これを成就させる事が、私共の使命と考えております。本校教職員一丸となって邁進致しますので、同窓各位によるご指導・ご鞭撻をお願い致します。

最後になりましたが、皆様方の益々のご健勝を祈念し、ごあいさつと致します。

開校記念講演

（財）大川美術館理事長兼館長
昭和16年紡織科卒業

大川栄二氏

演題「今　あなたは！」

第三回の卒業生として誇りあるこの桐生工業高校で講演ができるチャンスを与えて頂いたことに感激しています。「欠点を長所にする」と言うことを今日はお話したい。私は短所を長所にした人生でダイエーの副社長・マルエツの社長になれた。頭（偏差値）が悪いので記憶力では無く身体で仕事を覚えた。私はお喋りである。この短所を本音で話すコミュニケーションに使い信頼を得た。せっかちである。仕事は明日に伸ばさないことへ繋げた。非常にテンパである。正義感やロマンに切り替えた。語学（英語）が弱い。が桐工で学んだ知識が仕事上で「商品学」として非常に役立った。これからの国際化の時代、語学は重要ではなく相手の立場に立って物を考える。即ちヒューマニズムであり、文化が分かることが重要である。

「日本の常識の嘘」、学歴社会ではなく実力主義である。文化・文化と言っているが「文明」と勘違いしている。文明に心は関係無く、学問・便宜性から生まれたもの。「文化」は心から生まれるもの、カルチャー（教養）である。人の心の痛みの分かる事である。心の入った絵を見て文化を感じることが大切です。もう一つ、アメリカの文化が来て日本が悪くなった。伝統的な「第一のアメリカ文化」ではなく、強盗・殺人が蔓延（はびこ）る・自分だけ良ければいい・使い捨ての文化・「第二の文化」を日本の若者が吸収してしまった。今の子供達が悪いのは親が悪いから、親が悪くしてしまった。これからは皆さん自身が変わっていかなければいけない。

「若さの特権」人間はロマンが無くなった時から年をとる若いうちに挑戦する。何でもしなさい。トライして、失敗して、それをプラスにする。私の話の中から何かを感じて下さい。

映画「眠る男」の鑑賞では、画面の美しさ人間の動きを見て下さい。生きていることだけでも素晴らしいことを感じて下さい。とも話されました。

略歴……

大正十三年桐生市に生まれる
桐生高等工業（現群馬大学工学部）色染化学科卒業
昭和二十二年
三井物産㈱入社・副社長、マルエツ社長、ダイエーファイナンス会長・相談役、
平成二年七月勇退
平成六年四月
桐生市に(財)大川美術館開設
群馬県教育委員会教育委員、県総合開発審議会委員、愛媛県・町立玉川美術館名誉館長、県民二百万人記念映画「眠る男」制作に携わる。

戦後五十年 スポーツ特集

苦節十年

24・25W　新井庫太郎

昭和三十三年一月一日、第三十七回全国高等学校ラグビーフットボール大会に初出場を果たし見事ベストエイトに輝きました。帰り見ますれば戦後間もなく本校にもラグビー部が誕生致しました。当時は用具にも事欠きジャージもスパイクも手造りでした。校庭では硬式野球、軟式野球、陸上、ハンドボール、ラグビー等各部が入り乱れての練習で硬式野球の打球の行方が一番心配でした。野球部員が一打毎に上、上、下、と打球の行方を他の部員に大声で知らせた様子が昨日の様に思い出されます。創部当時は高崎高校がダントツで涙を飲む時代が続きました。

当時の全国大会へ出場するのには先ず県代表になり埼玉新潟代表と戦い三県で一チームが出場権を得る訳けです。

苦節十年後輩達が先輩達の夢をかなえてくれました。広沢町在住の大友氏の指導を仰ぐと共に先輩後輩一魂となり、片山主将を軸に猛特訓が開始されました。合宿訓練に入る前に群大工学部の研究室より出火、そのために学校での合宿は許可されず校長にお願いして小生宅での合宿を認めていただきました。元より夫婦二人の駆け出しの住居、六畳二間と四畳半に十八人の後輩との生活が始まりました。

朝五時より暗くなる迄の練習は正に血の出る様な特訓の連続でした。先輩後輩の歯車が良い状態で噛み合った結果高崎高校を破り県代表となり新潟代表、埼玉代表を連破し全国大会出場が決定しました。現在は一県一校大会に出場出来ますが、其の後三十八年間桐生地区からは大会に出場していません、残念な事です。

何事も目的に向かって努力を致し、永い伝統を護り乍ら先輩から後輩へと心身共に健全なバトンタッチが出来ますれば幸いです。

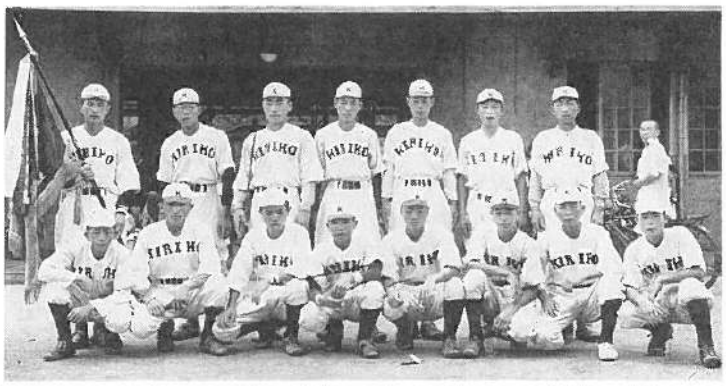
母校を始め同窓会の益々のご発展をお祈り申し上げますとともに併せて皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

白球の思い出

25D　木村一夫

疲れて話す気力もない、汗と泥まみれのユニホームのまま大の字になって見た夜空のきれいな星、今日も練習が終わったという数分の爽快感、足をひきづりながらの帰り道に食べたさつま羊羹と、とろろ天、空きっ腹を癒してくれた味は忘れられない。と同時に練習を思うとぞっとする、石炭殻がまかれた内野、時にはトラックの輪立ちがあった。外野は膝までの雑草、守備練習でノックが始る、ボールを恐がったら終わらない、時にはぴんた、ノックバットが飛んでくる、当時は用具にも苦労した。ひびの入ったバットに釘を打ち、電線用のテープを捲いて使い、ボールは持ち帰り縫って翌日の練習に使うのがあたりまえ、時々授業中にも縫った。「おまえのボールは打ち易い」と上級生に言われ毎日の様にバッティングボールを投げた。使いすぎて肘が伸びず、曲った肘を自分の体重で寝押しした。何回あったろうか、遠征試合で貨物車に乗った。その後グレードが上ってトラック、それも木炭車、こんな環境の中から登りついた全国大会の出場だった。そして私が野球にとりつかれたインパクトでもあった。昭和二十一年、戦後第一回の全国中学校野球大会は甲子園が米軍に接収されていて使用できず阪急西宮球場で開催された、出場校は十九校だった。大会第三日目対戦校は京津代表の京都二中で二対一で惜敗した。当時の新聞による戦評では京都二中の田丸、桐工内沼両投手の好投、両軍内、外野手の好守に試合はスピーディーに進み京都が二回の一点を守って逃げ切りを計れば桐生は必死となって田丸攻略につとめ、遂に八回に同点としたがその裏京都は四球を足場に左翼線の二塁打で決勝の一点を挙げ息づまる投手戦で興味深い試合であったと記されている。

今回同窓会報の寄稿にあたり懐かしい当時を思い起し、素晴らしい体験をさせて戴いた井上監督さん、OBの諸先輩に改めてお礼を申し上げ高校時代の思い出と致します。



甲子園の思い出

28W　石関健次

高校球児の夢・目標である甲子園出場が決まった。昭和27年の選抜高等学校野球大会である。選抜の推薦を得ることは大変で、幸にして桐生工は投打のバランスがとれ、特に投手の島津（日大熊谷組のエース全日本代表で世界選手権大会で優勝の原動力となる）打撃で高野（立大プロで活躍）を中心にチームワークも良く甲子園出場権を手にすることが出来ました。第一回戦不戦勝で第二回戦は愛知代表豊橋時習館と対戦し、桐生工は二回裏石関が死球で出塁し、次の中山は四球とチャンスを迎え、二番高橋がライト線にヒットを打ち一点が入りました。島津投手の巧みな変化球で時習館を二安打完封し一対０で勝ちました。準々決勝戦は兵庫代表の鳴尾と対戦鳴尾の投手中田（慶大プロで活躍）は今大会屈指の右腕で捕手藤尾（巨人で活躍）との黄金バッテリーです。試合前から雨が降り出し四回頃から一層激しくなりました。試合は投手戦となり、桐生工は六回までに安打と四球で五人の走者を出したものの、藤尾捕手の牽制球でさされチャンスをものにする事が出来ず延長十二回裏鳴尾に一点を取られ涙をのんだのです。二試合の中で私にとって忘れることの出来ない思い出があります。二回戦の時習館との試合で、たしか九回の表二アウトランナー二塁で私の守っていたショートに打球が飛んで来ました。普通なら楽に取るボールでしたがランナーが前を走り心が動揺していたのかイレギュラーしたのかボールがグローブに入らず膝に当たりました。幸に二塁手佐藤が二塁ベース寄りに走ってきたところにボールが行きアウトとなり、こんなに嬉しかった事はありません。あの時ボールがそれていたら試合がどうなっていたかわかりません。試合終了後阿部監督から「神様が助けてくれたんだよ。石関は普段の練習で一生懸命手抜きをしないでやっているからだよ」あの土壇場で経験したことがその後人生に於いてあらゆる面で手抜きをすると結果が良くないことを教訓に今日に至っています。夢に見た甲子園出場は最高の喜びでした。

ハンドボール全国制覇

28W　金子善治

四十一年前の昭和二十四年、桐工ハンドボール部は全国的には殆ど無名で、県大会で優勝するのも大変であった。

当時私が入部したのも新入部員が少なく、二・三年になればレギュラーになれると思ったからであった。

三年になった昭和二十七年先ず春の東日本大会で準決勝に勝ち進み自信をつけ、全国大会（現在のインターハイ）に県代表として出場した。全国大会では順調に勝ち進み、準々決勝で優勝候補の桜台（愛知）に十対一と大勝、準決勝で栃木の足利高（東日本大会優勝）に苦戦はしたものの三対一で勝ち、決勝戦は延長の末静岡の清水商高を九対七で降し全国の頂点に立った。

どんなスポーツでも全国を制するのはそれなりの根拠があると思うが、当時の監督であった池田先生の指導は技術面、心理面をうまくコントロールし、部長であった小川先生は、大阪の宿舎は暑くて眠れないのを二回も替えて安眠と休息をとらせ陰の力であった。

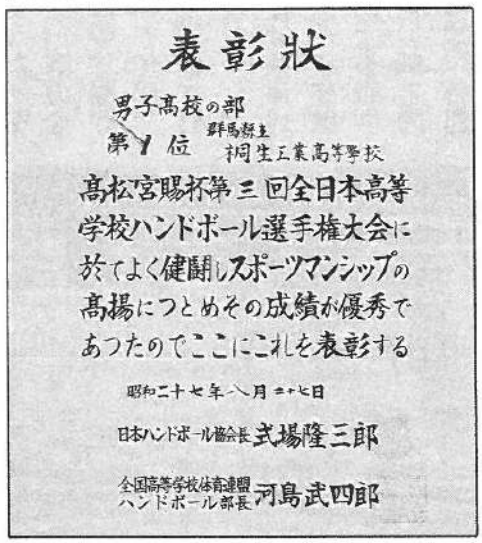
大会前の合宿で体力の限界まで挑戦し、十三人の執念が結集したチームワークは最も大きな力となったと思う。

高松宮殿下より賜杯を受けた感動は、この年になってもしっかりと脳裏に焼きついて、無形の宝である感がある。

私の六十一年間の人生で種々の事柄に直面したが、ハンドボールで体得した自信は様々な形で、掛け替えのない影響を与えてくれたと思う。

今年三月、かつての監督であった池田先生が来桐の折り、部長であった小川先生と部員約三十名（先輩・後輩）で旧交をあたため合った。ハンドボールの話に花が咲き、刻の過ぐるのも忘れた。

ハンドボールで培った友情は又これからも良き人生を約束してくれそうである。



表彰状

男子高校の部
第１位　群馬県桐生工業高等学校

高松宮賜杯第三回全日本高等学校ハンドボール選手権大会に於てよく健闘しスポーツマンシップの高揚につとめその成績が優秀であつたのでここにこれを表彰する

昭和二十七年八月二十七日

日本ハンドボール協会長　武場隆三郎

全国高等学校体育連盟ハンドボール部長　河島武四郎

桐工バレー部のあゆみ

26M 周東正夫

私達がバレーボールを始めたのは戦後間もない頃でした。先輩の周藤晴二さん（前同窓会副会長）等によりバレー部がつくられました。当時は食料も衣類も乏しい時代でした。従って用具は数少なく貴重品であり、コートも整地はしたもののひどいものです。

当然のことながら技術を熟知した指導者も居らず、先輩に教えて戴き固く重いボールで練習に励む日々でした。

ようやくチームの形ができて、試合をしても勝てません。

そんな折り、本間亮光先生と大澤光融先生が赴任され「三年で県下を制覇する」と宣言されたのです。その日から練習は厳しさを増しました。礼儀、コート造り、朝練習、放課後の練習は陽が落ちてボールが見えなくなる迄続きます。テレテレしているとうさぎ飛び、げんこつも落ちてきます。腹は減るし、ふらふらになり一日の練習が終わります。春と夏の休みには青蓮寺をお借りしての合宿です。庭にテントを張り炊事場を造り、全て当番制で炊事洗濯風呂沸かしを行います。

技術面では日本大学の選手と共同合宿をしたりコーチをお願いして向上を目指したのです。精神面でも朝の座禅、講話、夜の度胸だめしと、根性を植えつけられました。

こうして三年、成果が上り桐生市制三十周年記念高校大会に優勝し横浜市の関東高校大会に初出場したのです。

これ等根性のバレーは後輩に引き継がれ、優秀な選手が育てられ、県下高校バレー八回連続優勝、全日本高校総体六年連続出場と偉業を達成し群馬に桐工ありと伝統の灯がともされたのです。

卒業後は『桐工OB』を結成、第七回福島県、第九回北海道の国体に出場しました。

少年期に強烈な感化を受けたお二人の先生は他界されましたが「一期一会の師、友」それはすばらしいものでした。四十年過ぎた今も仲間が集い語らいの時を過ごしています。

戦後の陸上部

陸上部　木村広治

戦後いち早く陸上クラブを再建したのは桐生であった。本校の陸上部も優秀な選手が揃っていたので県下に短距離で名をとどろかせた。その中でも昭和二十一年秋の関東大会に出場したリレーは二位入賞を果たしたのであった。そのメンバーは宇野氏を中心に根岸氏、浅見氏、増田氏であった。増田氏によれば物資不足の時代、靴も満足に履くこともできない折り、この大会で借り物であったが初めてスパイクを履いて走った。その感触は今でも残っているそうです。競技場も神宮が使用できずに高等師範のグラウンドでの開催と今ではとうてい考えられない競技会であった。

中心メンバーの宇野氏は群馬県陸上競技選手権の百米で四回優勝し、国体等でも大活躍した。

狭い校庭では野球、ラグビー、ハンドボール、陸上と毎日練習に励んでいた、当時県下はもとより、全国でも活躍していた部ばかりなので、まごまごしていると練習場所がなくなるという状態であった。

桐工ソフトテニス部の足跡

30M2 毒島久雄

初代同窓会長朽津さんも軟式庭球部員として活躍し後の先輩方も当時の大きな大会に出場していました。今の全国大会になってからは昭和二十九年に団体優勝と個人戦を含め伊勢市での全国選手権大会出場を機に、桐工ソフトテニス部が県下で羽ばたくようになりました。昭和三十、三十一、三十二年と関東、東日本大会（三十二年で中止）に連続出場、三十三年～五十七年迄四十七～五十年の四年間を除き国体を含め連続出場しています。顕著な戦績は昭和三十年肥塚育治、周東英次組関東三位、三十七年下山勝弘、内山和雄組国体出場、三十九年須藤昇二、小堀秀雄組関東三位、前原茂、川田佳和組同五位、団体では惜しくも準優勝、四十一年柴田耕、森下修一組、金田良二、乙幡茂組国体出場、五十二年大沢隆、大竹陽一組関東十六、五十一年、植木一吉、前原昇組県高校総体優勝、五十二年植木一吉、林英雄組県高校選手権優勝、二十九、三十九、四十六年と団体優勝三回、関東大会、全国大会を含め一〇〇名出場しています。私も先輩の清水敏夫先生との縁で軟式庭球部に入り、昭和二十九年度全国大会県予選の団体戦では全勝し桐工軟庭部の初優勝に貢献できました。夢の全国大会出場を果たせこの経験があってこそ、昭和三十三年に母校に勤

務して以来転勤迄の二十五年間軟庭部の顧問を続けられたのだと思います。清水先生との二人三脚の時代もありましたが部員は優秀な生徒が多く、休日は終日、放課後は真暗になる迄熱心に練習に励んでいた。卒業後の先輩と後輩の親交関係も厚く現在でも続いています。合宿で夜中の肝試しは忘れられません。今の高校生はクラブ活動への参加を嫌い帰宅部などと称し放課になれば一目散に校門から去り、伝統あった桐工ソフトテニス部も部員無く非常に残念です。部活動を経験し我慢と人間性を培ってほしいものです。

第四回全国高校バスケットボール選手権大会

27W　奈良幸男

この日を思い出すには、45年の歳月が過ぎ去っています。夏の激しい闘いの一日でした。この朝部員25名桐生駅より高崎へ出発、会場は高崎女子高校体育館で、準決勝戦と決勝戦が行なわれ、午前は前橋商業と、準決勝戦は順当に勝ち、午後の決勝戦を待つAブロックは予想通り高崎高校が決勝戦に進出、高崎高校とは練習試合では勝っているので、私達が得意とする速攻と激しいデフェンスが出来れば負ける事はないと、自信は、ありました。前半は10対12と2点差リードされ後半戦は15対12とリードを奪い25対24と一点差で勝利を手中にしました。念願の初優勝です。この瞬間部員は歓喜の声と汗と涙が流れ落ちる体を抱き合い勝利に酔いしれました。45年前の遠い夏の日が、昨日の如く脳裏によみがえります。終戦6年目の日本の経済は少しづつは良くなりましたが、運動用具や施設、食料と現在では考えられない厳しい環境でした。

遠征費は学校の部費では全国大会へ出場も出来ません、寄附やアルバイトの収入を加えても、まだ不足の状態でした。8月6日父兄に見送られ桐生駅を出発し夕方名古屋の宿舎に到着、8月9日開会式に参加、9時30分より金山体育にて開催、引き続き第三試合11時30分より長崎東高校と対戦、前半は19対27で8点をリードされ、後半は追撃も16対17と一点差に結局33対46で前半の失点がそのままで初戦の敗退でした。コーチも居ない私達のベンチは作戦もありませんでしたが悔いのない全力の試合でした。25年にこの人と出会いがありました。桐工バスケット部にその後何度か黄金時代がありました。卓越した指導力とプレイヤーとしても素晴らしい人です。現桐生医師会会長大和建昭式の長年の指導による結果と思います。ここに改めて敬意を表したいと存じます。彼も26年度全国大会では東京代表で準優勝し高校選抜選手にも選ばれました。

馬小屋

29D　金井荘六

今回の原稿について予めお断りしておかなければなりません。余りにも昔の事、そして資料不足のため、私の記憶を頼りに書かなければならず正確かどうか大変心配なことです。

さて、我々卓球部のエピソードを語る時、何といっても練習場の事が当時の部員の皆さんの頭に一番浮かんでくるのではないでしょうか。話は戻りますが、昭和二三、二四年頃、まだ私が中学生の時のことです。当時敗戦のため、国武館で剣道が出来なくなり、卓球場として解放され桐工の人が練習に来てたことがありました。後で触れますが、練習場の狭さ故ではないかと思います。その後桐工へ入学し卓球部へ入部して驚きました。それは練習場です。俗に「馬小屋」と言われる狭い練習場で、4人のクロス打ちがやっとでした。

桐工五〇年史上巻の一項を開いてみると桐工全景がありその左端に小さな小屋があります。それがかつての卓球部練習場です。そういう中にあっても春夏の合宿では、本館二階に練習場を移し、二台で練習出来たことは幸せでした。しかしながら我が卓球部が弱体であったかと言うとそうではなく、県の中堅として活躍したものでした。因みに私が一年生の時のメンバーは三年石崎、佐竹、青木、二年田畠、山崎、一年井上、鈴木、安田、金井、おおよそ以上のような顔ぶれで次の大会に出場しています。特に金井、高橋組による群馬県卓球選手権一般男子ダブルス優勝は、決勝戦の相手が全日本の常にベスト4に入る実力者であったと言うことで大変評価されました。

昭和二六年秋期国体出場、石崎、同二八年六月関東大会出場、金井、同八月マッカーサー元帥杯全国大会ジュニア代表、金井。同十月秋期国体出場、金井。二九年一月全日本卓球選手権一般男子ダブルス出場、金井、高橋組。

私の在学した三年間の実績

は以上です。大変雑駁な文章となりましたが、私の寄稿とさせていただきます。

二年連続神宮出場

40D・W　田口進一

私達は、昭和三十八年、三十九年と、二年連続で全国高等学校定時制軟式野球選手権大会への出場を果たした。振り返ると昭和三十八年の時の選手は、投手園田、捕手谷の三年生コンビを軸に四年生の垣上、毒島、三年生の私、逸見、小林、向田、二年生の石原でとてもチームワークがとれていた。特に好投手園田のストレートの球の伸びは、県下ナンバーワンであった。また打撃の方ではリードオフマンの逸見、クリンナップトリオの私、垣上、谷の破壊力は、全国でも通用する打撃陣であった。全国大会の出場が決まった時、選手達は、東京六大学野球で知られる、神宮球場での野球の試合が出来るとあって胸を躍らせた。選手のみならず、まわりの人達をも沸き返らせたものだった。県の敷島、城南球場では試合なれしていたが、いざ神宮球場に入って練習してみると観客席が多く、球場全体が広く感じたことに驚いた、今もあの感動は忘れない。試合は準々決勝、準決勝と駒を進めてきたが、準決勝で八王子高校と対戦し、もう一歩及ばず涙を飲んだ。決勝には進めなかったが、準々決勝から最高打撃賞の対象になっていた為、四割六分三厘という打率で、私が選ばれた。

また群馬県大会では、私の活躍が認められ、二年連続最優秀選手に選ばれ、大変な喜びを味わった。これも偏にチームメートのおかげである。昭和三十九年の全国大会では、園田投手が時々肩の痛みを訴えるようになった。その為、私がリリーフをやりながら何んとか遣り繰りして出場したが、一回戦で惜しくも敗退した。しかし自分達の力を精一杯出しきり青春の汗を流したことに悔いはない。

追記　部長の松本先生、監督の岩上先生には大変御世話になり深く感謝申し上げます。

全国大会クラス出場記録

昭和13年
第3回日本年少者陸上競技大会　四〇〇m　**優勝**

昭和21年8月17日
第28回全国中等学校野球大会出場

昭和23年4月1日
第1回選抜高校野球大会出場

昭和24年10月
軟式野球全国（東西対抗）大会出場　**決勝進出**

昭和25年8月
全国ハンドボール大会出場

昭和26年8月20日
バスケットボール全日本選手権大会出場

昭和26年8月
バレーボール全日本選手権大会出場　**この年より六年連続出場**

昭和27年4月6日
第5回選抜高校野球大会出場　**ベスト8進出**

昭和27年8月28日
ハンドボール高松宮杯・第3回全日本選手権大会**優勝**

昭和27年10月17日
ハンドボール第7回福島国体　**四位入賞**

昭和27年10月
バレーボール第7回福島国体出場

昭和28年7月31日
ハンドボール第6回東日本選手権大会・桐生市　**優勝**

昭和28年10月
ハンドボール国体出場

昭和29年7月25日
テニス第4回軟式庭球団体対抗大会　**敢闘賞**

昭和29年8月
ハンドボール第5回全日本選手権大会出場

昭和29年8月
軟式テニス全日本および東日本選手権大会出場

昭和30年7月
軟式テニス東日本選手権大会出場　**翌年も続けて連続出場**

昭和31年8月20日
ハンドボール第7回全日本選手権大会出場

昭和32年8月1日
軟式テニス全国選手権大会出場　**この年より十五年連続出場**

昭和33年1月1日
ラグビー全国高校選手権大会　**五位入賞**

昭和33年8月
卓球全日本選手権大会出場

昭和35年8月2日
ハンドボール第11回全日本選手権大会出場　**この年より四年連続出場　昭和38年にベスト8進出**

昭和35年8月2日
第42回全国高等学校野球選手権大会出場

昭和36年10月12日
ハンドボール第16回秋田国体　**三位入賞**

昭和37年8月5日
第15回全国陸上選手権大会円盤投げ　**四位入賞**

昭和37年10月5日
陸上第17回国体出場四〇〇m　**三位入賞**

昭和38年8月22日
定時制軟式野球第10回全国大会　**ベスト8進出　翌年も続けて出場　三回戦進出**

昭和40年8月3日
第18回全国陸上選手権大会三段跳　**三位入賞**

昭和40年8月4日
バスケットボール全日本選手権大会出場

昭和40年11月28日
定時制卓球全国定時制四地区代表大会　**優勝**

昭和40年12月26日
第16回全国駅伝競走大会出場　**翌年も続けて連続出場**
昭和41年8月
レスリング第13回全国高校選手権大会出場
69kg級　五位入賞
昭和41年10月24日
軟式テニス第21回国体出場
昭和42年8月25日
定時制軟式野球第14回全国高校選手権大会出場
昭和43年6月9日
定時制全日本陸上競技大会出場
昭和43年7月15日
県教育長　インターハイ出場選手激励会
昭和43年12月
第19回全国駅伝競走大会出場**この年より六年連続出場**
昭和44年8月7日
ハンドボール第20回全日本選手権大会　**三位入賞**
昭和44年10月26日
軟式テニス第24回国体出場
昭和45年8月4日
バスケットボール全日本選手権大会出場
昭和45年8月22日
定時制卓球全国大会出場
翌年も続けて二年連続出場

昭和47年8月
定時制陸上全国大会出場
昭和47年10月25日
陸上第22回国体出場
やり投げ　**三位入賞**
昭和48年8月1日
軟式テニス全国選手権大会出場
昭和48年10月
陸上第23回国体出場
五〇〇〇m　**三位入賞**
昭和49年6月
定時制陸上部二名・卓球部一名　全国大会出場
昭和49年8月5日
第27回全国陸上選手権大会
五〇〇〇m　**五位入賞**
昭和49年10月25日
陸上第29回国体出場
五〇〇〇m　**五位入賞**
昭和51年8月3日
バスケットボール全日本選手権大会出場
昭和51年12月26日
第27回全国駅伝競争大会出場
昭和52年8月1日
軟式テニス全国選手権大会出場　**この年より四年連続出場**
昭和53年8月2日
卓球第47回全国選手権大会

ダブルス出場
昭和54年8月3日
バスケットボール全日本選手権大会出場
昭和57年8月2日
軟式テニス全国選手権大会出場
昭和58年1月8日
アイスホッケー・スケート代表選手壮行会
昭和58年10月
赤城国体　女子一名が団体体操出場　**総合優勝**
昭和59年1月
スケート全国大会五名出場
昭和59年10月8日
女子体操第39回国体出場
昭和60年1月18日
スケート全国大会出場
昭和60年7月14日
女子体操第40回国体出場
女子総合優勝
昭和60年7月
体操一名、陸上一名
インターハイ出場
昭和60年9月15日
水泳部二名第40回国体出場
昭和60年10月25日
陸上第40回鳥取国体出場
少年B一〇〇m　**四位入賞**
八〇〇m　**四位入賞**
砲丸投げ　**六位入賞**

昭和61年8月5日
第39回全国陸上選手権大会
八〇〇m　**五位入賞**
昭和61年8月17日
水泳部全国総体　四名出場
昭和61年9月7日
水泳部第41回国体出場
昭和61年12月21日
第37回全国駅伝競走大会出場
昭和62年8月5日
第40回全国陸上選手権大会
八〇〇m　**二位入賞**
昭和62年8月20日
水泳部全国選手権大会出場
昭和62年8月25日
軟式野球全国選手権大会出場
昭和62年10月30日
陸上第42回国体出場
一五〇〇m　**四位入賞**
昭和63年10月7日
第43回国体出場
体操部一名　陸上部二名
少年B一五〇〇m**三位入賞**
昭和63年12月25日
第39回全国駅伝競走大会出場　**第一六位　翌年も続けて連続出場**
平成元年2月21日
第2回千葉国際クロスカントリー世界選手権大会　陸上ジュニア男子**団体二位**
平成3年
第26回全国定通制陸上競技大会出場
平成3年12月
第42回全国駅伝競走大会出場　翌年二年連続出場を果たし**七位入賞**の成績を残す
平成5年
水泳二名第48回国体出場
八〇〇mリレー**団体入賞**
平成6年8月16日
全国定通制軟式野球大会出場
平成6年9月7日
水泳部第49回国体出場
平成7年
インターハイ体操出場
平成7年8月20日
全国定通制柔道大会
団体戦　**ベスト8進出**
個人戦　**ベスト16進出**
平成7年10月
水泳部・体操部第50回国体出場
平成7年
全国体操選抜大会
跳馬優勝・床五位入賞
平成7年
インターハイ　体操出場
跳馬優勝

（桐工五十年史より）

平成八年度 総会開催

最多百十三名参加

平成八年七月六日、桐生市産業文化会館にて百名を越える会員の方々が参加され盛大に総会が開催されました。

開会にあたり五十嵐会長・加藤学校長より挨拶を頂き、五十嵐会長の議長で議事が進行されました。

平成七年度事業報告・決算監査報告が承認され、支部活動状況報告で、埼玉県・関西支部の記念講演等詳細が報告され、平成八年度事業計画予算案・役員改選（二十一世紀に向けた）の提案があり満場一致で承認されました。

周藤晴二副会長（支部設立に貢献された）へ感謝状の贈呈がされました。

記念講演　佐藤富三氏

「桐生織物略史とその影響」地域に与えた社会的影響！白滝姫伝説に始まり、桐生織物の起源と発展過程を今日の隆盛へと生活感にあふれ、皆さん感銘を受けました。

懇親会は本日の講師であった佐藤富三氏の乾杯に始まり講演の余韻を残しながら、広域になった皆さんの歓談は尽きることありませんでした。校歌斉唱で会場一杯輪になり再会を期して閉会しました。

会　長　五十嵐健雄
副会長　池田　光二
　　平賀　彰之
　　木村　広治
☆山崎　敏夫
　　北川藤一郎
☆中野　明
☆印　新役員

第五回 同窓会親善 ゴルフ大会

第五回の桐工同窓会親善ゴルフ大会が昨年同様、赤城カントリークラブを会場に盛大に開催されました。参加人員は百六十名と昨年をやや下回りましたが、支部では、新里チームが初参加し大会に花を添えました。

大会は大間々支部の二度目の優勝で幕を閉じました。又、個人戦では競技委員の石関二六氏が初優勝を飾り、シニアのベスグロでは村田永昌氏が七八回の新記録を樹立しました。

優勝　石関氏

支部対抗の部

優　勝	大間々	支部
準優勝	四・五	〃
三　位	十五	〃
四　位	七	〃
五　位	八	〃
六　位	十二	〃
七　位	笠懸	〃
八　位	十一	〃
九　位	藪塚	〃
十　位	太田・前橋・職員	〃
十一位	十六	支部
十二位	十三	〃
十三位	十七	〃
十四位	十四	〃
十五位	加藤鉄工	〃
十六位	本部	〃
十七位	十一	支部
十八位	足利	〃
十九位	埼玉	〃
二十位	九	〃
二一位	三・六・十八	〃
二二位	新里	〃

優　勝　大間々支部
ネット合計三六四・八
高草木喜一・金子登・星野鉄夫・松島保二郎・丸山圭次

準優勝　第四・五支部
ネット合計三六六・八
村田永昌・金子昌弘・新井日出男・小林正夫・萩原清作

個人の部

優　勝　石関二六（十七）
準優勝　赤石　昇（第一）
三　位　関山保夫（第八）

各賞の部

ベストグロス
一　般・小保方英児　七四
シニア・村田　永昌　七八

ドラコン
一　般・安蔵浩樹・小堀勝美
シニア・下山浩一・高草木喜一

ニアピン
前原廣光・津久井孝充
灰野正治・村田永昌

ベスグロ　村田氏

支部だより

関西支部の歩み

支部長　今井嘉吉

卒業以来それぞれが個々の交流の中で励まし助け合い乍ら互いに研鑽し努力した人生は求道の連続であった。

同窓会本部の提案並びに埼玉支部長米山稔様のアドバイス、近畿、岡山在住諸兄の熱意で平成六年二月二六日の関西支部設立総会は、共に思い出せる故郷と母校の思い出をもった、同窓の友による集団の誕生である。

愈々活動の年その新春、平成七年一月十七日午前五時四六分、阪神大震災に襲われた。想像を超えた大災害となり我々は被災地の対応に追れた。我が関西支部会員の安否の確認を支部事務局、京都の大野副支部長、奈良の坂田副支部長に依頼した。断水、ガス供給停止、通信、交通等も途絶えた中で的確な安否の確認は困難を極めた。

平成七年二月十日阪神大震災に伴う緊急常任幹事会を開催した。議事は被害状況報告、その対応について、平成七年度支部総会について、其の他。

平成七年五月二七日、第二回関西支部総会を開催し、被災の中で最悪の不幸が無く、無事であった喜びを分かちあった。被災地の生活環境がほとんど破壊され、復興に向け必死に取り組んだ一年余日。

平成八年四月二七日、第三回関西支部総会を開催した。

第一部・総会

第二部・講演会「心」

法曹宗管長

薬師寺管主、高田好胤師「般若心経」を通して「心」を説かれ、又、仏法を学ぶということは、己れの未熟さを気付かせていただくものであ

㈱非破壊検査にて

ると説かれ、分かりやすくユーモアにも富んだ内容でした。

第三部・懇親会

高田好胤師を囲み記念撮影後真藤幹事の司会で和やかに行われた。五十嵐同窓会長による乾杯、新参加者の自己紹介歓談、宴たけなわ、校歌斉唱、加藤校長先生の発声で万歳三唱を高らかに轟かせた。鮒子田常任幹事の「来年もまた元気に集いましょう」と締めくくり終了した。

「桐雷関西」発刊、試写会、災害で互いに心かよわせ励まし合った友情は尊く明日への力となっております。

埼玉県支部だより

支部常任幹事　比企三蔵（和光市、41A）

埼玉県支部では第四回目の総会を、去る三月十七日に、熊谷市の「パストラ熊谷」で開催しました。熊谷での開催は初めてで、熊谷地区の同窓生が中心となって、準備等を行って頂きました。

総会には、本部から加藤校長、池田副会長、中里事務局長をお迎えし、参加者二十六名にて、和やかに開催されました。

米山支部長（行田市、23W）の開会の挨拶の後に、加藤校長から、桐工の現況の話があり、興味深く拝聴しました。また、小澤副支部長（行田市、35D）から、ようやく赤字から脱却したとの会計報告もあり、会場もほっとした雰囲気に包まれました。

今年の目玉として、特別講演「気功による健康生活」が、吉田幸弘（鳩ヶ谷市、31W）さんによって行われました。講演の最後に、二人の方が気功をかけていただき「体が軽くなったような……」と。内蔵が悪い人はかかりにくい、と言われ、心配した方もいたようです。

このように、埼玉支部では、年一回の総会（三月）を中心に、四役会、常任幹事会、懇親会およびゴルフ大会などの活動を行っています。

とうらい埼玉だより
第６号（10ページ）

また、年二回（一月、七月）の会報「とうらい埼玉だより」を発行し、会員相互の親睦をはかっています。最新号（六号）では、初代同窓会会長の朽津房次郎（14D）さんより、同窓会の歩みについての原稿を寄せていただきました。私ぐらいの年代の卒業生にとっては、初めて聞くお話でもありました。若月啓生先生、高瀬良一先生より頂いた原稿も、興味深く、また懐かしく拝読しました。さらに、現役の女子学生の、高校生活についても、男子生徒しかいなかった時代を過ごした者にとって、感慨無量のものがありました。

学校だより

ニュージーランド国際交流

星野 隆一

平成八年度ニュージーランド国際交流は、桐工として昨年度に続き、二回目の参加です。高工・桐商・桐工の三校による訪問団という形で七月二十日から八月一日までの十三日間、総勢三十五名（生徒三十二名、職員三名）で実施されました。桐工は十一名（男子五名、女子六名）の生徒が派遣となりました。

今年は桐商がワイウク校で、高工と桐工はオークランド市街に近いパパクラのローズヒルカレッジを訪問いたしました。

マオリセンター

今回の訪問日程の前半では、ホームステイ先からローズヒルカレッジに通学し、ローズヒル校の一人として授業に出席しました。片言の英語を駆使しながらホストスチューデントを含め、多くの生徒や先生と意思の疎通をはかることができました。また、私も同校の科学の先生宅にホームステイし、授業や学校施設など、見学させていただきました。

後半の研修旅行では、羊の毛狩り見学やマオリコンサート、ワカレワレワの間欠泉やフカ滝の見学、特に人気の高かったワイトモ鍾乳洞の土ボタルなどを見学することができました。また、オークランド市内では博物館や美術館、そしてショッピングも楽しみました。

このように桐工第二回ニュージーランド訪問は、自然、文化、伝統、生活や人間性に触れることができ、国際交流事業の大きな役割を果たす事ができたのではないかと思います。

最後になりましたが、校長先生をはじめ、多くの先生方や同窓会の方々に感謝申し上げ、報告といたします。

平成八年度群馬県民文化大学「高校開放講座」を担当して

電気科

今年度より標記講座の中の一講座を電気科が担当し開設することになりました。この講座は電気の基礎と家電製品の上手な使い方を学ぶことを重点学習課題としました。講座名は「これでわかった電気の不思議」とし、六月二十二日（土）～九月七日（土）の十回、三十時間に亘って開催しました。

受講生は、電気の一般的な話し、半田付け、電気工作、コンピューターの操作、高電圧による雷実験など、各テーマとも非常に熱心に参加し、全般的に時間が不足気味でした。受講生の年令は二十歳代前半　七十歳代後半と大層幅広く生涯学習の重さを実感しました。

閉講式では、立派な修了証書を手に、感激もひとしおの様でした。「閉講式後の懇親会では期間が長がった割に短く感じられたこと」、「家庭において、この体験を活かしていきたい」など、好感を持った意見が数多く出されました。

二年生・現場実習

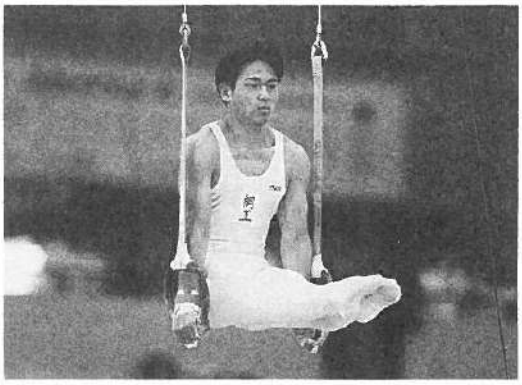
土木科　横尾

今年、初めて現場実習を行いました。対象は二年生で、建設会社の実務を理解し、勤労観、職業観を育成するとともに、協調性や対人関係の大切さについて学ぶことを目的とし、期間は、夏休みに入った七月二十二日～二十四日です。社団法人群馬県建設業協会桐生支部にお願いをしたところ、阿左美建設・新井土木・井草組・ウツミ工業・大川建設・梶山土木・北村土木・桐生建設・貴船工業・小池建設・坂本建設・三興建設・山藤組・島田組・日生土木・野村建設工業・橋本建設・三浦建設、吉田組の各株式会社、十九社に一名～四名の生徒を受け入れていただきました。

実施内容は、第一日目、八時出社、ガイダンスの後、現場見学、昼食後測量実習。二日目は、丁張りの現場実習、三日目は、現場でのコンクリート打設等、午後は先輩との対話と総括。勿論各会社の日程で前後はありますが、大概実施内容は同一歩調で行われました。三日間、職員は四パートに分かれ、各分担の会社を訪問、教え子が会社の中核として働いている姿を見、会社役員との話が出来ました。

「器高測量をした。距離を測り、そこに杭を打ちつけていく、簡単そうにみえるが、結構大変だった。午後は先輩の話を聞いて、社会のきびしさや現場での大変さを知った。いろいろ土木について不安だったこともだいたいわかった。短かった三日間だったけど、自分にとっていい勉強になったと思います。」小関　隆也

「いい体験ができたと思う。三日間、けっこう大変だったがよかった。この仕事がおもしろいナーと興味がわいてきました。」　小保方　達也



全国一位・体操部・跳馬

顧問　桜井孝雄

平成八年度全国高校総合体育大会体操競技（跳馬）で優勝した長澤選手（三M2）のことを紹介したいと思います。

競技は規定と自由の二つの総合得点で争われ、跳馬を最も得意とする長澤は最初の規定で9・65の高得点で二位につけ自由では初めて試合に使うE難度の「伸身笠松跳び一回ひねり」を見事決めて9・45の最高点で逆転優勝した。長澤は小学校三年生から体操を本格的に始め中学生では関東中学校大会で個人優勝をし高校では一年から国体選手として活躍している。

事務局だより

会報「桐蕾」が再発行されまして八年目になりますが、会員の皆様の手元になかなか届かないのが現状の様です。各支部長さんには支部会員部数をお届け致しております。

私の支部は数年前から地区委員さんより配布を受け、編集に関係した方々のご苦労が実る思いでした。

前橋支部は、前橋以西、高崎・藤岡・渋川・沼田地区等と合併して、群馬中央支部へと、又、関西支部は、五月より東海支部への働きかけを、関西支部は宮根事務局長（株非破壊検査秘書室長）さんがご苦労されております。四国・九州も含み静岡県より西を合併し、西日本支部の設立にご尽力頂いております。

今後は、東京・神奈川・千葉県等でご協力頂ける方を事務局までご推薦お願い致します。

訃報

加藤　義平元校長
秋葉　恒雄元教頭
栗原　義信先生

▼思いで多い先生方が今年度ご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げご報告いたします。▲

「桐蕾」の由来について

創立当時の本校の文芸部機関誌を「桐蕾」と名付けた。

それは当時、西田校長が同じく校長をしていた桐生高等工業学校（現群馬大学工学部）の校友会誌を「桐華」（とうか）と言っていたので、その「桐華」にあやかって、華（はな）に対し、蕾（つぼみ）と言う意味で「桐蕾」（とうらい）と命名したという。

ちなみにこの文芸誌は、当初二か月に一回発行を目標とし、昭和十年三月発行の創刊号から昭和十三年六月発行の九号まで、九冊の発行で終わっている。

十号からは校友会雑誌「校友会時報」（「会報」→「懐徳」→「時報」と改名）が引き継ぎ、さらに、昭和十六年から「桐工学徒団報」と名前が代わり、昭和十七年十二月の第三十号で終刊となった。

（五十年史上巻より）

◎埼玉県支部に引き続き、関西支部でも支部会報が創刊されました。会員相互の強い絆となります様期待いたします。

コミュニケーション誌　桐蕾

第1号　平成8年4月1日発行
桐生工業高等学校同窓会関西支部
事務局　非破壊検査株式会社
〒550 大阪市西区北堀江1-18-14
☎ 06-539-5840

桐蕾関西

（題字は第六代同窓会長　五十嵐健雄氏）

ごあいさつ
"明日を夢みて"
支部長　今井嘉吉　14W

関西支部会報「とうらい関西」の創刊号発刊に当り謹拝啓申し上げます。

平成六年二月二六日の設立総会から、坐の如き速さで時は経過し、其の間に阪神淡路大震災に襲われ、想像を絶した大災害の中で助け合い励まし合い苦難の一年でした。謹忠が様と申し上げる言葉しかありません。

群馬県立桐生工業高等学校同窓会関西支部の第二回総会（四月二七日）開催を前に愈々とうらい関西創刊号発刊の運びとなりました。題字は同窓会長五十嵐健雄様の揮毫を戴きました。衷心より感謝申し上げます。

支部設立の喜びを分ち合った会員の皆さんと総会で、とうらい関西の発刊を祝いたい。この活用に価値ある提言を期待しております。個性と自我が大切と言われ表現に欠け、魅力に乏しければ一顧だにされない欧米社会と、長幼の序を守り、両親への尊敬、親族への絆を大切にするアジア社会の価値観が、欧米の価値観「自我」に薄められてゆく今、自己主張と謙譲の美徳が何の矛盾もなく共存する社会であってほしいと信じている。

関西支部と、とうらい関西を活用し、親睦と融和と協調の意志を貫いて互いに研鑽し、情報の場となし、一体の価値ある集団を目指したい。

"明日を夢みて頑張ろう、夢こそ進歩の源。"

桐蕾関西創刊号（4ページ）

編集後記

桐蕾七号で、「戦後五十年それぞれの記憶」として特集したのにひきつづき、今号では本校の伝統と歴史のあるスポーツ面を、戦後五十年の特集第二弾として、各部の記録を基に編集してみました。

内容的には、硬式野球、軟式野球、ハンドボール、バスケットボール等、九部の全国大会を中心に、その輝かしい記録とそれを支えた人間ドラマを、できるだけリアルに描いていただきました。

私もその記憶の中にあるのは、昭和二十一年夏、全国中等学校野球大会へ、桐工が出場した時の印象であります。

当時、小学生でしたが、左翼手として出場した従兄弟の各場面写真を見ながら、話を聞いた時の感動！。なつかしい思い出の一コマです。

また、全国大会等の出場記録も掲載してあります。

ぜひ、当時を思い起こしながら、各支部での話し合いの資料として、いかしていただけたらと思います。T・K記